

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏 名 渋谷 百合絵

本論文は、序論、第一部において近代童話の歴史的展開を論じ、第二部ではそれを踏まえた上で、宮沢賢治の童話にあらたな意味づけを試みた論考である。まず序論では、戦後展開された「童心主義」批判を振り返った上で、あらためて鈴木三重吉の「赤い鳥」の活動が再評価されている。続く第一部の一章、二章では、巖谷小波の「お伽噺」の歴史的役割を見据えた上で、「赤い鳥」を中心とする大正期童話において、その概念の刷新が図られた意義が評価されている。その上で三章と四章では小川未明の「赤い蠟燭と人魚」と「白刃に戯る火」、五章では佐藤春夫の初期小説が取り上げられ、初期プロレタリア文学と「童話」との相互浸透の様相、あるいはまた、佐藤春夫の「小説」においてロマン主義的な幻想が作中の「童話」に仮託され、同時にまたその限界が自己相対化されていく構造が明らかにされている。これらはいずれも「童話」を限られた一ジャンルに閉じ込めることなく、広く近代文学史の展開の中に位置づける試みとして注目に値するものである。

第二部は宮沢賢治の童話の作品論からなり、一章で「よだかの星」、二章で「雪渡り」、三章で「まなづるとダアリヤ」、四章で「マリヴロンと少女」、五章で「銀河鉄道の夜」が取り上げられている。従来、賢治童話は近代童話史における異質性、特異性が強調される傾向が強かったが、本論文の特色は、「赤い鳥」童話との共通点に着目し、同時代の社会状況、あるいは作品の典拠を精査することによって、あらためてその時代的な意味を救い出していく点にある。たとえば「よだかの星」においては当時知られていた生物学的な知見、「雪渡り」では通俗教育幻燈会の活動や狐をめぐる伝承、「まなづるとダアリヤ」では同時代の菊花とダリアの品評会などの調査を通し、これらをコンテクストに想定したとき、賢治童話が表層的な主題とは別に、さまざまな批評性をメタ・レベルで発信している事実が明らかにされている。たとえば「マリヴロンと少女」においては、次第に主人公に安易な救いを与えるのを避ける方向に改稿が進み、主題が「相互理解の困難」へと深化していくプロセスがうかがえるのであるという。またそこに、賢治みずから関わっていた国柱会の国家主義的な志向が、自身の中で相対化されていく過程が読める、という指摘も傾聴に値するものである。また、「銀河鉄道の夜」の改稿過程にジョバンニの成長を読む通説に対し、ケンタウル祭と銀河世界の囃子詞とが呼応している事実に着目し、救いのない「さびしさ」を共有する「祈り」の一貫性が指摘されている。これらはいずれも、大正期の「童話」の枠組みを用いることによって、かえって実存的な性格を深めていく賢治童話の特色を指摘したものとして注目に値するものである。

本論に取り上げられている賢治童話の数には限りがあり、また近代童話史において論じ残されている作品も多いが、総じて江戸後期の草双紙から戦後の童話論争に至る巨視的な流れを踏まえ、ジャンルとしての「童話」を捉え直すことによって、宮沢賢治の童話の持つ歴史的な意義を明らかにし得た点は高い評価に値する。

よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。